

地域教育力活性化

教育の地産地消

インタビューダイアログ

この形式で実施している特別企画も今年度で3回目となる。ダイアログ形式とは、登壇者も参加者も平等の立場に立ち、話し合いを進めていく方法。

インタビュアーが幾つかの切り口で登壇者に共通と異質な質問を投げかけて、ショートコメントを引き出し、フロアーにも積極的にインタビューをする。それらをつないで、参加者全員に「地域教育力活性化・教育の地産地消」とはどういったことなのか、気づいてもらう。

登壇者には、3つのキーワードをもとに話していただいた。

① 高校生編

インタビュアー：若松 進一

コメンテーター：関 福生 馬場 祐次朗

飯田 OIDE 長姫高等学校&飯田市公民館 浅井 勝巳・木下 巨一・島田 駿吾・小島 一人

① コミュニティビジネス：地域人教育のコンセプト ②アントレプレナーシップ（起業家的な精神と資質・能力を育む教育）&ソーシャルデザイン ③人材のサイクル：飯田市の希望

・飯田市には4年生大学がない。高校を卒業すると、子どもたちは地元から出ていく。10人のうち4人ほど飯田に残る状態。大学に進学しても、他地域で就職しても、帰ってきたいと思える飯田をつくりたい。地域教育で育った学生を地域に帰す目的で、松本大学と飯田市が協定を結び、飯田 OIDE 長姫高等学校をつくった。

・島田君（高校生）の話…授業で地域人教育を学んでいたが、自分たちにしかできないまちづくりをしたいと、高校生が団体をつくった。なにかしたい、でも何をしていいかわからないという学生が入ってくる。公民館がバックアップしてくれた。カリキュラムが楽しい。「なにかしたい」ときに、支えてくれる人たちがいることが嬉しかった。3年間の体験活動を活かして、来年度から飯田市役所へ勤務することになった。

・成果として、学校の授業で行っていることをもとに、地域へ出て実践すると、イベントに対するハードルが下がり、地域が何かをするよというときにすぐに参加することができる。

また、イベントが終わると、お世話になったと地域の方がリンゴを持ってきてくださったりして、地域とのつながりが、強くなったと思う。

—普通の足し算が倍になるような活動だと思う。高校生と地域とのつながりはもともとあったのか。

・小中学校でしていることが、高校につながっている。

—予算はどのようにしているのか。

・学校には予算がついていないので、コミュニティビジネスでお金を生む活動をしている。補助金は一切使っていない。

—大学と協定をしたということだが、核になるのは。

・企画運営は高校、地域のノウハウは大学、飯田市には地域のキーマンを紹介してもらっている。具体的には、高齢者のいる買い物に行けない地域の人々を対象に、リアカーを使ってモノを売った。
・島田君…地元の PR をしたい、特産品を販売したいと思うが、運営がきびしい。ぼくらは、あくまで営業マンで、地域に商品を売り込んでいき、10%の活動費をいただいている。

—長野県は公民館の多いところ。しかし、高校生が優等生過ぎるような気がする。

秋田県北秋田市 松田 淳子

① 学び場 ② 高校生 ③ Gちゃん（元気・グレイト・ゴールド…な高齢者）

・秋田は学力日本一、秋田美人の里でもある。北秋田市生涯学習課では、地域と共に歩み、地域とともに課題解決を進めたいと、高校生の料理コンクールや高齢者による課題解決の取り組み（Gちゃんサミット）等を、生涯学習活動として開催している。

・公民館を利用することがほとんど無かった秋田北鷹高校生が、東日本大震災被災地のためにと公民館に集まり、リサイクルキャンドル 1,000 個を作成し岩手県田野畑村へ送った。また、平成 24 年 6 月、秋田北鷹高校、秋田大学、生涯学習課による、「バターもちプロジェクト」を立ち上げた。家庭科クラブによる地域貢献活動の一つとして、バター餅の里北秋田市に貢献したいと研究を重ね商品開発をした「醤油バターもち」が反響を呼び、同年の秋の産業祭 2 日間に 600 個も売ることができた。このことを契機に JA や民間企業が連携し、ほかにも地元の特産品を使用した商品を開発するなど、多くの場面で高校生が活躍することになった。

—飯田とよく似ている。高校生が成功体験をして次につながった。

・4 町が合併して、唯一の高校となり、なくなってしまったら大変と、地域の人々の期待や協力体制が増えてきた。生徒は、様々な賞を獲得し自信を持った。地域の人や家族の声掛けが嬉しいと言う。

—高校生は公民館にどのくらい来るのか。

・年 3 回のイベントに、準備や話し合いも含めて 10 日くらい。

—日ごろから、高校生が公民館にかかわるようになればいい。

—校長は 3 年くらいで転勤する。どのようにしているのか。

・学校は変わるが地域は変わらない。公民館や小中学校との連動をするなど、いろいろなところで地域の人と高校生が話し合っしてほしいと思っている。

—四国、最西の佐田岬に母校三崎高等学校がある。廃校になるかどうか崖っぷち。今年、「みっちゃん大福」を売り出す。興味深く聞かせていただいた。学校も生徒も盛り上がっているが、行政の姿が見えない。どうすればいいか。

・商品開発で民間企業等と連携することで、高校生のやる気をのばすことができる。公民館では、市民や年配の方々が関わってもらえるよう図り、研究の成果を発信するなど、高校生が地域と結びついて行くことが鍵となる。世代間交流も重要で、「バター餅の日（7 月 23 日）」に、園児や市民に食べてもらったり、一緒にバター餅体操を踊ったりと、地域に根ざした活動を続けている。

—地域の人材など、人づくりをするのは公民館の出番。公民館等地域の人をやる気にさせるのは行政マンの手腕である。

可児市 NPO 縁塾（岐阜県）

角野 仁美

① 地域課題解決型キャリア教育（エンリッチ・プロジェクト）②公助縮小・共助再生 ③学校と地域でアクティブラーニング

・可児市では、県立可児高等学校と地域の諸機関・諸団体が連携して「地域課題解決型キャリア教育」（通称：エンリッチ・プロジェクト）を展開している。課題は、やる気のある生徒だけが参加していることであったが、この夏は地域が企画した講座に1年生全員が参加。学校を含めた地域全体での取り組みに変わってきている。NHK でも取り上げられた。可児高校の生徒が、地域のいろいろな所へ出向き、地域の課題等大人と語り合い、キャリアアップすることを目指している。資金については、助成金や PTA 会費で賄っている。一番の成果は、「自分たちの地域は自分たちでつくっていきける」という感覚を、高校生だけでなく関わる人々が一緒になって感じる事が出来たこと。

—内容とか講師の話をもう少し詳しく。

・地域で頑張っている活動に参加したり、高校生が毎年2月に議会に提言をしたり、議会が企画した地域課題懇談会に参加したり、他には地域の企業による講演会・WS 等がある。

新居浜市高校生ボランティアサークル May（愛媛県）

野本 真有

① 高校生 ②創造 ③未来

・地域の小学生と「歩け歩け大会」、防災、障がいを持った方々との交流、新居浜市の企業とコラボレーションしてイベント等開催している。高校生から発信している活動。May は、初代先輩たちの頭文字をとったもの。「可能性」という意味もある。

・同級生や学校は実際にはかかわっていない。新居浜市の高校生が新居浜市をつくっていきたいと思っている。今、高校生であるわたしたちになにができるのか、年に1度、「私たちが創る未来へ」と題して、新居浜市や福祉協議会、新居浜の企業等に協力を得て、イベントを開催している。今年で3回目となった。今年度は7,500名ほど来てくれた。

・課題は、新居浜市の高校生と連携を取り合って、共に活動すること。呼びかけていきたい。

—すべて自分たちでやっているのはすごい。寄り添う大人はいるのか。

・地域の公民館で、初代メンバーの母親がサポートしてくれている。現在メンバーは18名。

—初代母親から一言。彼らがすべてプロモーションしている。中には「死んでしまいたい」という辛い気持ちを思っていた子も、元気になった。この子たちが将来を担ってくれると信じている。

—1日目の会で発表した、新居浜市のユネスコ部の高校生。活動を聞いて、ぜひ、参加したいと思った。新居浜市の高校生に呼びかけて、一緒に活動したいと思う。

—自分の中に刺激をもらった。今の高校生はすごい。未来は明るいと思った。

—全国の話聞いて、「地域のために」というコンセプトは同じなので、全国に広がれば良いと思った。



②地域・公民館編

インタビュアー：西山 博

コメンテーター：鈴木 眞里 古市 勝也

北海道占冠村公民館（北海道）

竹内 清孝

① 村内循環 ② バランス ③ 地味なことを楽しく

・公民館主事をしている。1,183人の住民、212市町村が合併前。現在は、村の行事もなくなった。教育委員会も5人しかいないので、したいことをすぐできるから、やりやすいところがある。

・合併問題で、自立の道を行くことにした。山を越えれば夕張、もう一つはさらに遠いところ。なにができるか熟議をした。楓の木を使ってメイプルシロップ作りや、公民館と大学が連携してお年寄りとの昔遊びなど、地域の力を活用することにした。お年寄りがノウハウを持っている。子どもと大学生とお年寄りのいい連携ができた。また、地域でエネルギーセミナーを開催、河原で太陽光発電をした。この活動から、若者を核としたエネルギーの未来検討委員会ができた。

—メイプルシロップは高いのか。

・カナダ産で1,700円くらい。

—公民館事業なのか。

・住民と熟議する中で、役場ですることにした。

・メイプルシロップを作ることによって、樹液というツールから産業と住民をつなげることができた。観光資源になる。また、大学生が高齢者と話をすることで、高齢者が電気のないところで過ごしていた経験談等を聞いてその一言が生きた検証となることもある。よりリアルな教材を見つけることができたと思う。エネルギーについては、遊び感覚で取り組むことにより、若い人の意識を変えることに役立った。

—エネルギーは公民館主催か。

・予算はほとんどかかっていない。謝金を少し渡して企業にお願いしている。

—メイプルシロップを製造するのはどこで。

・ノウハウは公民館で。採取は産業が。教育資源として考えていきたい。

—つなげていくのは大変だが、協定は結んでいるのか。

・結んでいないが、中央公民館で世帯数400人ほど。濃厚なサービスができる。

—マイナス 30 度の世界、電気がない、災害時有益になるのではないか、住民は周知しているのか。

・していない。公民館で知識を吸収して、住民に伝えていきたい。村内循環は、外に出向いて何かを持ってくるのではなく、なるべく村内で賅っていくようにする。いろんな分野での課題はあるが、地味なことを楽しく、雰囲気作りからやっていきたい。

—災害時のことについては、外に向かっても発信してほしい。

新潟市アグリパーク（新潟県）

真柄 正幸

① 日本初の公立教育ファーム ② 農業体験学習 ③ 学習指導要領

・子どもが対象で公の機関が設置した日本初の公立教育ファームである。昨年 6 月末にオープンした。敷地は 4 万平方メートル。本格的な農業体験学習を、指定管理者制度で、4 つの企業が関わっている。職員数は 22 名。宿泊施設もありじっくりと取り組んでもらっている。郷土愛を育むという目的もある。指導要領のカリキュラムですべて学校の授業。アグリ・スタディ・プログラムで大切にしていることは「五感で学ぶ」と「アグリ魂で学ぶ」（育てることと消費することを一体的に学ばせること）である。

—どうしてこれが、公民館編なのか。

・農村地帯が多い場所で、14 市町村が合併をした。農業関連施設をつくるのが合併の条件だった。食料受給率が 60% を超えている。公民館の主催事業で農業というキーワードでタイアップしている。収穫体験、食事体験、搾乳体験、羊とかかわりながらウィンナー作り体験等、公民館が企画して当施設を利用している。

・成果としては、開園後 1 年間で延べ 192 校、9,806 人の利用があった。子どもたちはこの体験を通じて、命の大切さと食への関心を高めている。また、社会性も育っている。

—発想は学校からの要望か。

・学校が子どもたちに何を学ばせたいかを明確にし、アグリ・スタディ・プログラムから選択して農業体験学習を行っている。アグリパークでは、学校が学ばせたい内容や要望をきちんと受け止めて対応している。

—公民館への提案は

・狙いを明確にして、アグリパークをどんどん活用してほしい。

佐賀市立公民館（佐賀県）

鶴 ちふみ・江藤るり

① 支援者育成 ② 地域課題解決支援事業 ③ 協働によるネットワーク

・平成 24 年、佐賀市の公民館では、地域委託から、市直営となった。

・鶴—本条公民館で主事をしているが、運営委員会から委託されて地域に雇用されている。

・江藤—赤松公民館で平成 18 年地域雇用の職員として採用された。公民館には終わりが無い。何もわからないところから、頭をひねりながら始めた。

- ・公民館 GP に応募。公民館のあり方について学んだ。人づくりの拠点としての公民館をどうつくるか。社会教育的な機能が必要。まずは、職員の質をあげるため、様々な団体とネットワークをつくり、いろいろな場所へ行き話を聞き、課題解決につなげていっていった。
- ・現在、16 公民館が地域活動推進に取り組んでいる。声の強い人だけの意見が通るような会議はよくないと、各公民館主事がミーティングファシリテーションの研修を受けて実践した。資料ばかり見ていた人が顔をあげるようになった。自分の公民館ではないところへ出向き企画運営したり、NPO と一緒に講座の企画をしたりと、活動の幅を広げるようになった。
- ・課題は、地域活動（自主防災を含め）を支援する人が不足していること。また、主体性がなく、課題解決のための情報交換ができていない。地域住民と私たちが活動を共にしながら気づき、次につなげていきたいと考えている。

—市直営になった変化は出てきたか。

- ・運営協議会時代は、自分たちの地域の職員だという気持ちが強かったが、直営化となると、社会教育課からの辞令で移動がある。地域で何を求められているかということを引き継ぐことが大切になってきた。

松山市久米公民館（愛媛県）

松村 暢彦

- ① 主体者を育む まちづくりの当事者意識や防災をキーワードに育む ②生活防災 日常生活の中にまちづくり・防災の目線を入れ込む ③クロスロード授業 正解のない問いに準備・意見を聞いて考える

- ・久米地区の住民は 3 万人。10 年前から小学生が主体、中学生がリーダー、大人がサポートをして安全マップ作りをしている。実際に町歩きをして、危険地域等を地図に書き込んでいく。そのような取り組みの中から、2 年前から防災意識向上事業に取り組んだ。

- ・今年は、北久米小学校 6 年生に、正解のある防災活動、正解のない防災活動について授業を行った。災害が発生するといろいろなことが起こる。例えば、愛犬を避難所に連れていくかどうかということについても、意見が分かれる。そのようなことについて、小学校 6 年生と本気トークをした。
- ・クロスロードをした理由は、今まで、大学で教鞭をとって、正解のあるものだけ教えてきた。しかし、正解のないものが生きていくなかにはたくさん出てくる。迷いながら、自分で判断し行動していく力が必要だと感じたから。

- ・成果は、「自分にとっていいと思った」ことをしていくことに気づいたこと。マップは、小学生が作り、そのマップを作った小学生が中学なって、新しいマップ作りに挑戦する小学生を指導する。地域の方々も、いろいろな意味での社会教育活動ができる公民館へと展開させていくことができればと思う。

—大洲の一番水没しそうな公民館が避難場所となっている。個人的に命を守るしかない。避難訓練とか徹底的に教育されているのか。

- ・徹底していない。松山は被害が少ないところだが、水害は同じように起こる。「このタイミングで非難しましょう」というマニュアル等をつくる必要があるかも。